

公衆衛生学

1 構成員

	平成16年3月31日現在
教授	1人
助教授	0人
講師（うち病院籍）	0人（0人）
助手（うち病院籍）	1人（0人）
医員	0人
研修医	0人
特別研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	0人（0人）
研究生	1人
外国人客員研究員	0人
技官（教務職員を含む）	0人
その他（技術補佐員等）	1人
合 計	4人

2 教官の異動状況

竹内 宏一（教授）（H1. 7. 1～H16. 3. 31）

中村 晴信（助手）（H11. 11. 1～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成15年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	4編（0編）
そのインパクトファクターの合計	4.60
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	2編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0編（0編）
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	0編（0編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0編（0編）
そのインパクトファクターの合計	0

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Nakamura H, Kouda K, Tokunaga R, Takeuchi H: Suppressive effects on delayed type hypersensitivity by fasting and dietary restriction in ICR mice. Toxicol Lett 146 (3): 259-267, 2004.

2. Nakamura H, Shimoji K, Kouda K, Tokunaga R, Takeuchi H : An adult with atopic dermatitis and repeated short-term fasting. J Physiol Anthropol Appl Human Sci 22 (5) : 237-240, 2003.
インパクトファクターの小計 [2.24]

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

1. Iwashige K, Kouda K, Kouda M, Horiuchi K, Takahashi M, Nagano A, Tanaka T, Takeuchi H : Calorie restricted diet and urinary pentosidine in patients with rheumatoid arthritis. J Physiol Anthropol Appl Human Sci 23 (1) : 19-24, 2004.
2. Kouda K, Nakamura H, Fan WY, Takeuchi H : Negative relationships between growth in height and levels of cholesterol in puberty : a 3-year follow-up study. Int J Epidemiol 32 (6) : 1105-1110, 2003.

インパクトファクターの小計 [2.36]

(2) 論文形式のプロシーディングズ

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Takeuchi H, Kouda K, Nakamura H : Natural Medicine, Traditional medicine and School Health. Jpn J School health. 44 (suppl) : 122-123, 2003.

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

1. Minakata K, Kawai K, Horio F, Takeuchi H, Suzuki O : Accumulation of Copper in Kidney of Spontaneously Hypertensive Rats. The 3rd International Conference on Food Factors : Physiologic Functions and Disease Risk Reduction. 2003.

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

(3) 総 説

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）

C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

(4) 著 書

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

(5) 症例報告

- A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの
- B. 筆頭著者が浜松医科大学の他教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの（学内の共同研究）
- C. 筆頭著者が浜松医科大学以外の教室に所属し、共著者が当該教室に所属していたもの

4 特許等の出願状況

	平成15年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5 医学研究費取得状況

	平成15年度
(1) 文部科学省科学研究費	2件 (610万円)
(2) 厚生科学研究費	0件 (0万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	0件 (0万円)
(5) 受託研究または共同研究	0件 (0万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	3件 (40万円)

(1) 文部科学省科学研究費

中村晴信（代表者）基盤研究（B）(2)「食事制限に対する馴化過程：脳内ホルモンの動向」510万円（新規）

中村晴信（代表者）萌芽研究「食事制限に対する馴化過程：心理・生理的応答からの検討」100万円（新規）

6 特定研究などの大型プロジェクトの代表，総括

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	0件
(3) 学会座長回数	0件	2件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	15件
(6) 一般演題発表数	0件	

(2) 国内学会の開催・参加

4) 座長をした学会名

竹内宏一 第49回東海公衆衛生学会 2003年7月, 浜松

竹内宏一 第46回東海学校保健学会 2003年9月, 名古屋

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

竹内宏一 日本学校保健学会理事

竹内宏一 日本公衆衛生学会評議員

竹内宏一 日本衛生学会評議員

竹内宏一 日本民族衛生学会評議員

竹内宏一 日本産業衛生学会評議員

竹内宏一 日本健康教育学会評議員

竹内宏一 日本産業精神保健学会評議員

竹内宏一 日本代替・相補・伝統医療連合学会評議員

竹内宏一 日本体力医学会評議員

竹内宏一 日本生理人類学会評議員

竹内宏一 東海公衆衛生学会評議員

竹内宏一 産業衛生学会東海地方会理事

竹内宏一 東海学校保健学会理事

中村晴信 日本生理人類学会評議員

中村晴信 東海学校保健学会評議員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	1件	0件

(1) 国内の英文雑誌の編集

中村晴信 J Physiol Anthropol Appl Human Sci (日本生理人類学会), a member of Editors PubMed/Medline登録あり, インパクトファクター無。

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

中村晴信 J Physiol Anthropol Appl Human Sci (日本) 1回

9 共同研究の実施状況

	平成15年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	2件
(3) 学内共同研究	1件

(2) 国内共同研究

甲田勝康，徳永力雄（関西医科大学）食事制限と肝機能に関する研究。

樋口重和（秋田大学），他。生理人類学の海外研究拠点の拡大に関する調査

(3) 学内共同研究

寺田護（寄生虫学）食事制限の馴化過程に関する研究

10 産学共同研究

	平成15年度
産学共同研究	0件

11 受賞

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 思春期における身長とコレステロールに関する疫学的検討

小児期から適切なライフスタイルを確立することは、将来の生活習慣病予防の観点からも重要である。高脂血症は肥満とともに動脈硬化の危険因子とされており、また、小児期に血清総コレステロールが高値を示した者は成人になっても高値を示すというトラッキング現象が報告されている。一方、小児期のコレステロール値は、第二性徴等の影響から、思春期前に高値となり、思春期前半に低下するとの報告もある。我々は、小学5年生を中学2年生まで追跡した結果、身長の伸びと思春期前のコレステロール値は負の関係を示すことを明らかにした。このことにより、単に総コレステロール値を小児期からの生活習慣病予防の判定基準とすることについては十分な検討が必要であることが示された。

（竹内宏一，中村晴信）

2. アレルギー性皮膚炎におよぼす食事制限の影響

マウスに短期間絶食もしくはmildな食餌制限を行い、アレルギー性皮膚炎におよぼす影響について検討した。マウスにはdinitrofluorobenzene (DNFB) 塗布によりアレルギー性接触性皮膚炎を耳介に発症させた。短期間絶食群およびmildな食餌制限群は自由摂取群に比べ、耳介の厚み、およびその耳介組織の炎症像ともに、同程度の抑制が観察された。また、酸化ストレスの指標として

8-hydroxydeoxyguanosineを用いた免疫組織学的検討において、短期間絶食およびmildな食餌制限による炎症抑制には酸化ストレスが関与していることが示された。さらに、副腎皮質ホルモン受容体拮抗薬を投与により絶食による炎症抑制効果は消失したことから、アレルギー性皮膚炎の抑制には副腎皮質ホルモンが関与していることが示唆された。

(中村晴信, 竹内宏一)

3. アトピー性疾患と間歇的短期間絶食

アトピー性皮膚炎患者を対象に短期間絶食の効果を評価した。24時間絶食を毎週1回、20週にわたって施行し、その臨床症状をSCORAD indexを用いて評価したところ、絶食前が48.5から38.3へと低下した。

(中村晴信, 竹内宏一)

13 この期間中の特筆すべき業績、新技術の開発

14 研究の独創性、国際性、継続性、応用性

1. 食事制限に対する馴化過程の検討

生体に必要なエネルギーおよび栄養素の不足による栄養不良に加えて、エネルギーの過剰摂取による肥満が新たな栄養不良として、今日最大の公衆衛生上の問題のひとつとなっている。一方、30%–40%程度の食事制限により、寿命延長効果や、悪性腫瘍等の慢性疾患の発症や症状の進展抑制効果がみられることはよく知られている。また、絶食についても、短期間繰り返して行うことにより、同様に寿命の延長効果が見られた報告がなされている。しかしながら、食事制限を実際にヒトに対して施行してみると、その長期間の継続が困難である場合が多く、また食事制限中止後にリバウンドが起こる場合も少なくない。30%–40%程度の食事制限や短期間の絶食であっても、その導入期には生体に対して身体的および精神的ストレスとなることが考えられるが、この部分についてはいまだ未解明な部分が多く残されている。我々は、食事制限に対する馴化過程を、代謝、内分泌、および生理・心理的な面より研究することにより、その解明を進めている。これら食事制限の研究は、食料供給、人口爆発、栄養不良等、今後さらに拡大すると予想されるこれらの公衆衛生学的問題についての解決に寄与するものと期待される。

(中村晴信)

15 新聞、雑誌等による報道